

ある手紙

原民喜

青空文庫

佐々木基一様

御手紙なつかしく拝見しました。あなたから手紙をいただいたり、そのまた御返事をこうして書くのも、思えばほんとに久振りです。空襲の激しかった頃には私はよくあなたやほかの友人に、いつ着くかあてもない手紙を、何の意味もない手紙を、重たい気分で、しかも書かないではいられない気持ちに駆られて書いたものです。が、今こうしてペンを執ってみると、ふと何となしにそんな奇妙な気分がするのはどうしたことなのでしょう。

私ははじめて『近代文学』第一号を手にした日のことを思い出

します。当時、広島で罹災して、寒村の農家の二階で飢えていた私は、むさぼるようにあの雑誌にとびつき、ひどく興奮したものです。久しい間、ああしたものには飢えていた所為もあつたでしょう。しかしまたそれにはそれで人を感激さすだけのものがあつたようです。たしかにこれは新しい文学運動の中心になるだろう、そんな風な予想からあの雑誌の順調な発展を祈らないではいられませんでした。その後、あなたたちの雑誌は多くの困難を克服しながら、みごとな発展を遂げています。『よくも揃いも揃つて優秀なメンバーを集めたものだ』など世間の噂をきくたびに私は何となくうれしいのですが、終戦以来今日に到る迄の混乱と虚脱のなかにあつて、つぎつぎに生彩ある問題を提起し検討してゆく、

あなたたちの精力と速度、それから、現象にひきずり廻されない
確固たる立場にとくべつ感心するものです。

私は広島 of 惨劇を体験し、次いで終戦の日を迎えると、その頃
から猛然として人間に対する興味と期待が湧き上りました。『新
しい人間が生れつつある、それを見るのはたのしいことだ』東京
の友人、長光太からそんな便りをもらうと、矢も楯もたまらず無
理矢理に私は東京へ出てまいりました。

『新しい人間』を求めようとする気持は今もひきつづいてい
ますが、それにしても、今ではその気持が少し複雑になっていま
す。何といっても、敗戦直後は人間の悲惨さえ珍しく、それには
それにつづく漠たる期待もありました。三年を経た今日では人間

の生存し得るぎりぎりの限界にまで私は（生活力のない私は）追いつめられています。この手紙を書きながらも、ふと空襲警報下にあるような錯覚と気の滅入りを感ずるのもそのためなのでしょう。

それにしても『日本沙漠』とは近頃、誰が云いだした言葉なのでしょう。花田清輝も、沙漠について、砂について、蟻地獄について、さまざまの考察をしているようですが、どうかするとこの頃は人間の魂まで砂のなかに埋没されそうになるのです。

昨年火蓋を切られた『新日本文学』対『近代文学』の論争も、その後焦点が紛糾しすぎてちよつと分りにくくなつた節もありますが、結局は人間と現実に対する測定の立場の相違かもしれませ

ん。この二十年間の社会と文学のうごきを知るものにはあのよう
な論争が避け得なかつたこともほぼ推定されます。それに、あな
たたちが人間の権威を内に築こうとしていることは何といても
素晴らしいことです。しかし『政治と文学』の問題は私にとってあ
んまり問題が大きすぎます。作品や作家の印象について語りま
しよう。

人間に対する期待は容易に満たされないことが分かりかけました
が、かねて前から待望していた新しい小説の出現には近頃かなり
たんのうしました。どうかすると今でもまだ小説の不振とか新人
の欠乏など云つてみたがる人もあるようですが、私は決してそう
とは思いません。少くとも戦時中の惨たる凍死状態に比らべれば、

今はどれだけ立派な人々が有望な仕事にとりかかっているかわかりません。梅崎春生、野間宏、椎名麟三、そういう新しい名が雑誌に現れるたびに、私は貪るように読んでみました。それぞれこれらの人たちはすぐれた技術と新しい意図を持っていて、充分興味をそそるようです。なかでも野間宏の『魂の煤煙』は今後どれだけ発展するか非常に期待されます。『顔の中の赤い月』については大概の人の意見が一致していたようですが、この人こそは恐らくほんとうに大成する作家でしょう。『魂の煤煙』（1）を読んだとき私は思ったのですが、人間の顔やちよつとした身振のなかにその人を生み育てた環境や歴史を探ろうとする描写法は、小説として何も目新しいものではないとしてもこの作者の観相術に

はなにか豊かで独自の魅力があるようでした。中村真一郎の『死の影の下に』も魅力ある小説でした。この人とは逢って話をしてみてよく分りましたが、非常に頭脳の回転の速い人で、鋭利で過剰な神経の持主のようです。それに詩人や批評家としての天稟を恵まれている珍しい人です。

頭脳の回転速度といえば、やはり石川淳の『明月珠』『焼跡のイエス』などを思い浮かべます。あのピンと緊張した極から極へまっしぐらに読者を追いつめてゆく手は、何というスタイルの魔力なのでしょう。この人はもう身から出た錆を身につけた独自の風格さえあつて、なかなかちよつとかなわなようです。伊藤整の鳴海仙吉ものも時々、私をハツとさせます。これは自意識の処

理、小説叙法の装置——などと云うと変てこですが——について新分野を拓いてゆくものではないでしょうか。

丹羽文雄の『蕩児』や船山馨の『現在』を読むと、デフォルメされた世相が一応巧みにひびいて来ます。ことに船山馨の場合、烈しい自虐の調子が人を惹きつけるのですが、それでいて、読後の物足りなさ、うそ寒さは一体どういう訳なのでしょう。

『近代文学』創刊号以来、毎号執筆している埴谷雄高の『死霊』には、この作者のその身魂を投じて悔いない心意気につくづく頭がさがります。これこそは日本に嘗てなかつた小説の世界を築くものでしょう。今迄読んだ部分だけでも、作中人物の対話の斬新さ、夢や狂気にまで滲透してゆく心理の翳など大変なものです。

現在のそのような環境であのような仕事を続けて行くということは、殆ど言語に絶する忍耐を要する業かもしれない。そういえば、これは小説ではないが、戦時中黙々として『戦争と平和論』を書きつづけた本多秋五も偉い仕事をしたものです。

その他まだ私の目に触れた範囲で期待している人に馬淵量司、鈴木重雄などがあり、未知数ながら来年あたりから活躍するだろうと思える人に若尾徳平、野田開作などがあります。

サルトルの『嘔吐』を読んだ感銘もなかなか忘れ難いものでした。恐らく『ユリシーズ』以来久振りで私を震撼させた書ですが、このことは何も私にとって、目下流行の実存主義哲学や肉体の文学とは関係のないことですから、ここでは述べますまい。ただひ

そかにおもうのは、いま夢中で『嘔吐』を読んだ日本のうら若い一人の青年が、やはり根底から震撼されるともにはじめて文学のスタートを切る気持ちに突きやられたのではないかということだ。こんな空想が描かれてなりません。

あれを読みこれを読み、——近頃は私も雑誌の編集をしている関係上、なま原稿だけでも二千枚は読みました——絶えず作家や作品名を賑やかにぐるぐる考えつづけていると、何だかのぼせ気味になってしまいます。しかし——

『たとい、他人がどのような立派なものを書こうと、それが、作家であるお前にとってどうしたというのだ。他人の作品にばかり見とれてお前の書くものはどうなのか。お前はパスカルの葦では

なかつたのか。極地に身を置き、山嶺に魂を晒し、さゝやかな結晶を遂げようとする作家の祈願は忘れたのか』と、こういう風な声はいつも私のなかで唸りつゞけています。できれば私も十年前のようにひとり静かな田舎で、好きなものだけを讀んだり書いたりに暮らしていたいのです。だが、現在の私にはそれはとても不可能なことです。現に身を休める部屋さえ得られず、雑沓のなかで文学のことを考えていると、これも吹き晒しの極地にいるおもいです。

いつかお逢した際、来年は『近代文学』で十九世紀小説の再検討から二十世紀風の小説の提唱をするということを行いました。それをたのしみにしていきます御元気でいて下さい。来年は是非

『停まれる時の合い間に』を書いて下さい。

一九四七年十二月八日

原民喜

青空文庫情報

底本：「日本の原爆文学1」ほるぷ出版

1983（昭和58）年8月1日初版第一刷発行

初出：「月刊中国」

1948年（昭和23）2月号

入力：ジェラスガイ

校正：門田裕志

2002年7月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

ある手紙

原民喜

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>